

## 江差追分を日本中に広めた

初代 浜田喜一

北海道初の日本遺産認定のまち江差町。江戸時代の後期にニシン漁で活気づくこの土地は「江差の五月は江戸にもない」と謳うたわれるほど栄えていました。また、芸術的民謡



〔「江差追分会館」展示〕

の最高峰と称される江差追分は、毎年秋に全国大会が開かれ、この時期の江差町は熱気と興奮のなか、江差追分一色に染まるのです。

江差追分は、特にメロディが美しく練り上げられ、全体が大きな波のようなうねりをもって構成されていて、その一つ一つの波がまた、さまざまな装飾的な唄うたいまわしによって唄うたわれています。

この江差追分が今日のように人々に知られるようになるまでには、一九三五年に発足した「江差追分会」をはじめとする多くの関係者の並々ならぬ苦心が重ねられているの

です。

戦時下、暗い影をおとした昭和の前期、江差追分を普及した功労者が、初代浜田喜一はまだきいちでした。彼は、数多くの民謡の唄い手の中でも、華やかな芸風をもつ芸能のプロとして、江差追分を全国はもとより、国外にまで広めたのです。

喜一は、一九一七年、正木家の四男として江差町に生まれました。もともとは漁師の家系でしたが、ニシンが去った後、船も失い、また父も病気がちだったため、母が作る\*タンキリ飴あめを兄弟で売り歩いて、家計を助けていました。

そんな喜一の唯一の楽しみは、病気の父が教えてくれる江差追分を唄うことでした。赤ん坊の頃から子守唄代わりに聞いていた江差追分に次第にのめり込んでいった喜一は、その実力の高さから「神童」と呼ばれるようになりました。

一九二二年、五歳のとき、町内で行われた追分大会に初出場。そこで喜一は初めて、人前で唄うことの楽しさを知りました。みんなに見つめられて唄う晴れがましき、拍手喝采かつさい、うまく唄い終えた満足感に心が満たされました。

「またあんな舞台で唄ってみたい。」

喜一はますます唄の稽古けいこになりまし。

その後、函館での追分名人大会でも優勝。十三歳の時、

旅回りの一座に入り、函館、青森、秋田、室蘭、苫小牧、樺太からふと（現在のサハリン）と北海道内外を巡業するようになりました。巡業の旅にも慣れてくると、喜一の人気はますます高くなって、一つの会場では満足せず、次の会場へ追いかけてくる熱烈なファンもできていました。

一九三四年の春、十七歳になった喜一は、突然、今まで楽に出ていた高さの声が、いくら声をはっても出なくなりました。

「ひよっとして風邪を引いたかな。時間が経てば元に戻るさ。」と喜一は気楽に考えていました。ところが、何日経っても治るどころか、ますます悪くなる一方で、更に音を下げなければ唄えないという状況になっていました。

喜一の唄から、次第に生気が消えてしまいました。そうになると、客が一番に反応し、舞台に出る時は盛大な拍手で迎えてくれるのに、唄が終わって引き込むときはほんの少しの拍手といった具合でした。喜一は自分が情けなく、もどかしくなりました。座長にも、声が出るまで休むよう言われましたが、「休めば、もう永久に舞台にあげられなくなるのではないか。」と恐れていました。喜一はどうしたらいいものか迷い、「こんな時、お父ちゃんなら、どうする

だろう。」と思うと、無性に故郷が恋しくなり、江差への帰郷を決意しました。

「喜一、声が出ないな。そりゃ声変わりだ。喜一も大人になったってことさ。心配はいらん。ま、しばらくは焦らずに、家でぶらぶらしていれば。」

三年ぶりに戻ってきた江差。父は、喜一の声を一声聞いただけで声の変調を見抜いていました。喜一は、父の言葉に、胸のつかえが一気にとれる思いがしました。舟を出してイカ釣りに出かけたり、函館に行ってみたりして唄から遠ざかった暮らしをし、夏頃には、声の方も悪いなりに落ち着きを取り戻していきました。始めの高い音は無理にしても、普通にはなんとか唄えるまでに回復し、少しでも唄えそうだと思うと、また舞台への思いがふくらみ、自分の芸の力を試すため、東京へ出る決心をしました。

しかし、東京での芸能生活は夢見ていたものと違いました。喜一は民謡の先輩から「もつと大きな歌手になりたかったら、民謡で流し\*をやれ」と言われたのです。

「民謡が唯一の特技である私に、自分で営業しながら唄い歩くなんてできるだろうか。」

最初は、情けなさや恥じらいから「お宅の店で唄わせて

下さい」とは言えませんでした。それまでは民謡好きの人々が聴きに來る民謡の大会で唄うだけだったので、自信をもって唄うことができ、拍手喝采をいただいていたのです。それでも、勇気を出して店に入り江差追分を心を込めて唄いました。そうしたところ、民謡に全く興味のない人も喜一の唄に拍手をくれ、民謡のよさを知ってくれたのです。「自分の唄を喜んでくれる人が、こんなに身近にいるんだ」と感じてから、喜一は積極的に自分を売り込むことが出来るようになっていきました。

その後、一九三八年に開催された、NHK札幌放送局開局十周年記念の「全道追分名人大会」に、二十二歳で出場した喜一は、見事優勝しました。これをきっかけにコロムビア社からレコードデビューしました。そして、翌一九三九年には、いよいよ「かもめ会」という一座を函館で結成し、北海道を中心に樺太や択捉えとろふ、国後くなしり、ヨーロッパ諸国まで江差追分を中心に巡業しました。

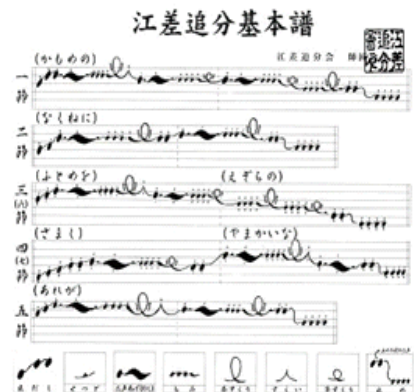
戦時中、旅芸人が來たことのない国後ではスパイ扱いされたり、戦争で興行禁止令が出たり、戦後はラジオからテレビへの移り変わりによって劇場に來る客を取られたりもしましたが、喜一は江差追分への情熱を決して捨てること

なく、一九六九年には、民謡の唄い手としては初めて東京の歌舞伎座での公演を成功させました。「唄は、聴いてくれる人があつてのもので、決して自分一人のものではない。」

喜一の口癖でした。この頃からすでに肺の病に侵され、手術で肺の一部分を切り取っていましたが、その病み上がりの体で、海外への公演、民謡大会の主催など、精力的に江差追分の普及に努めました。

喜一はまた、多くの人々に江差追分を生んだ故郷江差の町のことを話しました。

「江差はいい町ですよ。海が青く、空気が澄んで。私はいつもその海を見て潮の香りをかきながら育ちました。民謡巡業や闘病生活の辛かった時、何が私を支えてくれたかというと、やはり、子どものころ遊んだ江差の海を思うんですね。潮風に吹かれて、あの広いきれいな海に向かって、



〔江差追分伝承のため使用された曲譜の一例〕

追分を腹いっぱい唄った。その情景を思い出すと、また力が湧いてくるんです。」

一九七七年、江差追分は、喜一をはじめ、追分関係者の長年にわたる悲願であった北海道無形民俗文化財の指定を受けました。一九五五年以降、再三にわたる申請が空振りに終わっていただけに、このことは人々にとって、最大限の喜びとして受け止められました。喜一たちの江差追分普及の努力が、ついに実を結んだのです。

喜一は、一九八五年、六十八歳で亡くなりましたが、その弟子は千人以上にものぼりました。

その後、一九八七年に至って、喜一の芸と人柄を尊敬する多くの人々によって、この不世出の名人を永遠に記念すべく、喜一が愛したかもめ島に銅像が建立されました。

類い稀な美声の初代浜

田喜一の江差追分は、全国の人々に愛され、今も唄い継がれています。



〔かもめ島に建立した銅像〕

一九一七	北海道檜山郡江差町で生まれる
一九二二	江差町追分大会初出場する(五歳)
一九三〇	津軽民謡の旅一座に加入する(十三歳)
一九三四	江差へ帰郷する(十七歳)
一九三五	芸の力を試すため上京する(十八歳)
一九三八	全道追分名人大会で優勝する(二十二歳)
	レコードデビューをする
一九三九	「かもめ会」一座を結成する(二十三歳)
	江差追分を中心に北海道を巡業する
	肺結核となる(三十一歳)
一九四八	「浜田喜一民謡大会」を開催する(四十六歳)
一九六三	片肺切除の大手術をする(四十七歳)
一九六四	民謡人として初めて「歌舞伎座」の舞台上がる(五十一歳)
一九六九	死去する(六十八歳)
一九八五	

\*タンキリ飴：大豆、ゴマ、生姜などを混ぜた固飴を薄く引き延ばして、長方形に切ったもの

\*流し：楽器をもって酒場などを回り、お客のリクエストに応えて歌を歌う者